

## 過渡期の人物、吉満義彦 ——フランス、カトリック、デカルト——

川口 茂雄（上智大学）

吉満義彦（1904-1945）は、複数の意味において過渡期の人物であった。生きた時代が、過渡期だった。日本での西洋哲学研究の進展が、途中の時期であった。そして個人の生涯としても。岩下壯一もそうだが、必ずしもその知的精神的力量の大部分を発揮してから世を去ったとは思われない。

ここ数年来、大正～昭和前半期における日本の哲学者たちの手書き資料群に取り組む機会を個人的に得ている。吉満による手書き資料も一定数含まれる。むろん現存するものは断片的に限られており、取り組みには困難が多い。

吉満は1925年（第一高等学校を卒業、東京帝国大学に進学）にカトリックへの関心を強める。また並行して「より専門的に種々の哲学思想に自ら直接する様になった」。そして1926年に「学年末から私は自ら Gilson, Le Thomisme (Introduction Générale à la phil. de Saint Thomas)を読み出した」という。昭和初期の日本の帝大生個人で一応可能であったとは推察できるが、やはり平均的ではない、かなり知的に突出した仕方での宗教・宗教思想への入り方ではあろう。ジルソン（1884-1978）を補助線にしつつ、吉満の、時代の人としての側面と、孤高の人という側面とについて、幾らかの分析を試みたい。